

フォークナーの新訳の試み-時代小説の言葉を用いて-
翻訳の「経年対応」の観点から-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 正直 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5262

フォークナーの新訳の試み——時代小説の言葉を用いて

——翻訳の「経年対応」の観点から——

池内 正直

一 翻訳の経年対応について

時は去り星が移るにつれ、言葉の意味や用法、そしてその香りや味わいも変っていく。そのため、翻訳も過去の名訳の有無にかかわらず、時代の変遷とともに新しい試みが求められるのも、まことに自然のことである。例えば、野崎孝訳のフィッツジェラルド、『ライ麦畑でつかまえて』(一九五一、白水社一九六四刊)は、通算で二五〇万部を突破し(二〇〇二年)、今日でも年間一〇万部も売れている名訳である。これに対して、二〇〇三年に村上春樹は、この版の存在を百も承知、千も合点のうえ、「翻訳の経年劣化」(『読賣新聞』、二〇〇六)現象を踏まえて、同じ白水社から新訳の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を刊行した。^①

右の新聞記事で村上春樹は次の三点をあげて、新訳を試みる理由とその意義を論じている。すなわち、(1)単純なミス、(2)村上自身の翻訳に対する姿勢の変化、(3)日本語の文体の変化、と。その結果新訳の主人公の語り口は、

かつての野崎訳のいささか粗っぽい言葉遣いによって、大人の世界や社会全体に反抗的な姿勢を示している少年の口調から、かなり穏やかで内向的、思索的な人物の口ぶりになっている。このことは、双方の作品の冒頭の一部を見ただけでも分かるだろう。

(野崎訳) もし君が、ほんとにこの話を聞きたいんならだな、僕がどこで生まれたとか、チャチな幼年時代はどんなだったのかとか……くだんないことから聞きたがるかもしれないけどさ、実をいうと僕は、そんなことはしゃべりたくないんだな。

(傍線引用者)

(村上訳) こうして話を始めるとなると、君はまず最初に、僕がどこで生まれたとか、どんなみっともない子供時代を送ったとか……しょうもないあれこれを知りたがるかもしれない。でもはっきり言ってね、その手の話をする気になれないんだよ。

(傍線引用者)

確かに村上春樹訳の方が、今日の青年たちにとって馴染みやすい言葉が使われ、全体を通してはるかに読みやすいものになっている。今日の「クール・ジャパン現象」に、一層ふさわしい文体になっているのである。⁽²⁾

近年アメリカ文学の分野でも一つの話題の新訳は、若島正訳の『ロリータ』(一九五五、新潮社二〇〇五刊)である。この作品も、様ざまの点で評判の高い大久保康雄訳(新潮社一九五九刊、及び一九八〇改訳)を大きく越えて、豊かな語彙を存分に用いた名訳である。また先の村上春樹の翻訳の「経年劣化」論の第3点、〈現代の日本語の「空気」に合った訳語を〉という点でも若島訳は秀逸で、その典型的な例は、一二歳の少女ロリータに、様ざまの箇所次のような現代的な発話をさせていることに見られる。

「チヨーいけてるキャンプ地で…」、「すっごくフリオール」、「ちがうにきまってるじゃん」、「ムカつくんだよ」、「ピチピチの女の子」、「もうこのおスケベおやし」

(右掲書、一九一—八より)

それでは、フォークナーの翻訳ではどのようなことが問題になり得るのだろうか。そして、果たしてその新しい翻訳が求められるような状況にあるのだろうか。

二 フォークナーの従来の翻訳——「新訳」を試みさせる一要因

日本でフォークナーの紹介や翻訳が盛んになったのは、一九五〇年代から六〇年代で、代表的な長編や短編の作品が、各種の文庫版や世界文学全集に組み込まれた。一九六七年秋には、富山房からこの国唯一の『フォークナー全集』の、最初の一巻(阪田勝三訳『尼僧への鎮魂歌』)が配本された。その後三〇年余りかかって、この作家の長編と短編の主要なものはここに翻訳され収められることになった。ただ、この全集以後には、新しい翻訳はどのような形であれ、殆ど出版されていない。むしろ今日では、この全集も絶版になった巻が少なくないし、文庫版の作品も簡単には手に入らなくなっている(龍口直太郎訳の新潮文庫版の『フォークナー短編集』(一九五五年初版以来改訳、改版を重ねてきた)のような、もっともポピュラーな本ですら、大型書店でないと買えないのが現状である)。

そこで、フォークナーを読むもうとする新しい読者も、これらのやや年代を経た翻訳に頼らざるを得ない。そして、今日これらの翻訳を読みながら、(誤訳とか解釈の違いといった問題はひとまずさし措くとして)訳出された言葉や語調に限って考えたとき、幾つか気がかりなことに出会うのである。特に、訛りの強い黒人や南部の田舎の村や町の人々の

言葉の訳語などは、その典型的な例である。以下それらの具体例を少しあげてみたい。

二、一 黒人や田舎者の言葉 (I)

従来の翻訳の語調を示すものとして、『響きと怒り』(一九二九)から、黒人召使いの老女ディルシーとその孫のラスターの言葉のなかから二、三の例を、原文とともに引いてみよう(なお傍線は引用者による——特に訳語の箇所では、日本語としていささか気になるところに付してみた〔以下同様〕)。

(1-1) *The Sound and the Fury* の原文 (1929; Chatto & Windus 版' 1961) の例

(1) 'I've seed de first en de last,' Dilsey said. (297)

(2) 'En when wus hit he say fer you to do dat?' Dilsey said. 'Last New Year's day, wasn' hit?' 'I thought I jes be lookin whiles dey sleep,' Luster said. (272)

(3) Let's... find that quarter. ... 'Shut up that moaning,' Luster said. 'I can't make them come if they ain't coming Can 't I? If you don't hush up, mammy ain't going to have no birthday for you...' (2)

(1-1) 『響きと怒り』(1929; 尾上政次訳、富山房『フォークナー全集一五』、1969) の翻訳

(1) 「おら、始まりを見ただし、今おしまいを見とるだよ」(304)

(2) 「で、いつそれしるって旦那、言ったちゅうだね?」とディルシーは言った。この正月のことだったでねえ だか?」「おらみんな寝とる間に、ちよいと見とくべい思っただが」とラスターは言った。(279)

(3) 「あの二十五セント玉さがすべいよ、… そんなにブーブーやるのよさねえかって言っとるだに」とラスター

が言った。「あいつら来(こ)んけりゃ、こさせるわけに行きやしねえだろうがよ。おめえ、黙っちまわねえと、ばあちゃん…」(4)

(1—2) 同作品(高橋正雄訳、三笠書房、1959)の翻訳

(1) 「おらあ、最初とそして最後を見ただ」(316)

(2) 「そうするように入ったのは、いつだと思うだ？」とデイルシーはいった。「そりゃあ、この正月のことじゃあねえだか?」「だけんど、おら、みんなが寝てる間にしらべとこうと思ってよ」とラスターはいった。(292)

(3) 「おらの二十五セント玉をさがすべえ。… そんなにわめくじゃあねえだつてば」とラスターがいった。「あいつらの方できてくれなきゃあ、おらに來させることなんかできやしねえだもん」(24)

二、二 田舎の人々の言葉(II) — 他の作家の場合

ちなみに、フォークナーの作品の場合に限らず、黒人や田舎の農夫や行商人の言葉が、右の訳と同様に、日本のどこかの田舎の言葉のような調子で訳された例は、トウェインの『ハック』(の新潮文庫版)を始めかなり多い。スタインベックの短編小説「菊」(“The Chrysanthemums”)のなかの、道具の修理屋(鑄掛け屋)の例を引くと、

(1—1) “No. My scissors are all sharp.”/“All right then. “Take a pot.” He continued earnestly, “a bent pot, or a pot with a hole. I can make it like a new so you don’t have to buy no new ones.…”/“No,” she said sharply. “I tell you I have nothing like that for you to do.”

(2—1) …「それじゃ、ようがす。鍋はどうだね?…へこんだ鍋や穴のあいた鍋でも、新品みたいにしてあげる

だ。」「だめよ」彼女はそっけなく言った。「おまえさんにしてもらうような仕事はほんとなないんだから」〔菊〕大久保康雄訳、新潮文庫、p.16)

これらの翻訳はいずれも、アメリカの南部の黒人の訛りの強い発話や、南部や西部の余り教養をもたない庶民の言葉に対して、それぞれに工夫を凝らした訳語が捻出されている。田舎の町や村の人々の言葉の雰囲気を出すために、あえて日本のどこかの田舎の方言を思わせるような表現が工夫されている(フォークナーの南部の方言は、むしろ九州方面の言葉の方が相応しいのではないかといった、地域性にこだわった意見もあるようだが)。

だが、これらの言葉を今日の青年たちが読むと、相当に違和感を覚えるようである。たとえば、(二〇〇六年度に筆者が担当しているゼミの三、四年生の諸君の言を借りれば)、(一)「言葉の意味がよく分らない」、(二)「馴染みがない言葉で、読むのに苦勞する」、(三)「黒人を見下げた感じの訳語、語調に思われる」というような感想が多かった。なかには、(四)「うちのバアちゃんと同じ喋り方をしている」といった発言もあったが、最も射た感想と思われるものは、(五)「無理して日本語にした感じであり、面白みが欠ける」という意見であった。たしかに、今日の若い人々にとっては、関西弁などメディアでも馴染みの幾つかの地域語、地域口調を除いて、どこか特定の地域の方言は理解し難いものになっている。また先の訳語も、実際にある一定の地域で生きて使われている(いた)表現であるかどうかも、にわかには判定しがたい。

二、三 上流階級の人々の言葉

黒人や田舎の人々の言葉のほかにも、翻訳を読んで、もう少しどうにかならないものかと気がかりになるものの一つ

に、南部貴族の老人や若い婦人の言葉がある。たとえば、「女王ありき、一九三三（"There Was a Queen"）」のなかで、自分宛のラブレターを他人の目に晒したくなかった、未亡人ナーシサの言葉を引いてみよう。彼女はメンフィスに行き、手紙を所有する男に身体を委ねてそれを取り戻してきた。そのことを、大叔母に弁明する場面の一コマである。

(二一—一) "There Was a Queen." の原文 (W. Faulkner. *Collected Stories*)

(1) I was crazy for a while. I thought of people, men, reading them, seeing not only my name on them, but the marks of my eyes where I had read them again and again. (739)

(2) I knew I couldn't buy them from him with money, you see. That's why I had to go to... Men are all about the same,... Fools... I had to get them back. That was the only way that could do it. But I would have done more... (741)

(二一—二) 「女王ありき」(1933: 滝川元男訳、富山房『フォークナー全集—一〇』(1971)) の翻訳

(1) 「しばらくの間は、気が狂いそうでした。 あの手紙を読んでいる人のことを、男の人のことを思いました。手紙に出ているわたしの名前や...読み返したわたしの目の跡まで見られているのだと。(120)

(2) お金では買い取れないぐらい、わかっていましたもの。それで...に行かねばならなかったのです。...男なんてみんなおんなじですわね...みんな馬鹿ですわ。...手紙は取り戻さなければならなかったのです。でもことと次第によっては、もっとひどいことでもしたでしょうね。[121]

これらの訳語も、先の学生の感想のなかの(五)で示されたコメントが当てはまるのではないだろうか。つまり、訳

語にもう少しの香りや味わいを付け加えることができないうか。読者に作品を先へ先へと読ませるための、さらなるリズムやエネルギーを、添えさせることはできないだろうか。

以上、従来の翻訳の日本語表現の気になる端的な例として、黒人と名家の婦人の発話の訳語をあげてみた。以下では、それに対する一つの回答を試みてみたい。なお右に例として挙げた『響きと怒り』と「女王ありき」の該当箇所に対する新訳の試みも、その論述の末尾に示すことにしたい。

三 新訳の試みに向けて——「熊狩り」(“A Bear Hunt” 1933)の人物たちの言葉を起点にして

この作品の言語的観点から見た面白さの一つは、別の機会に触れたとおり、この短い作品のなかに様々の言語が行き交い、それらが混じりあいぶつかりあう有様を認めることができることである。〈マルチ言語世界〉が展開するのである。すなわち、(一) 作品の「口上」の部分を語る教養のある白人青年の言葉、(二) 物語の中心的話者ラトリフ (Ratiff) の庶民的な南部地方言葉、彼の発話のなかに織り込まれる (三) ヤクザ崩れのルシウス (Lucius) や (四) 老黒人アッシュ (Ash) の発する一層強い訛りをもった言葉である。(五) そのほかに、比重は少ないが、狩りに参加した古老たちや、傷だらけになったラトリフにその原因を尋ねる町の人々の言葉が、様ざまに混じり込んでいる。

さらにこの作品の言語面のもう一つの特色として、それぞれの語り手が〈同一の話題〉について、すなわち (一) インディアンに対する恐怖とか、(二) 過去の受難の体験について、それぞれの独自の言葉や口調で語る場面がある、ということである。それによって、それぞれの人物の語彙、口調などの、表現の違いやコントラストが、なお一層明確に示されることになるのである。以下ではその実際の場面を引き、従来の翻訳の例を掲げてみたい。そのうえで、新しい

翻訳のための言語や方法について、考えていきたい。

三、一 「インディアンに対する恐怖」を語る発話

(一) 教養のある白人の青年の言葉

二〇代の白人の青年が、かつて少年時代に友人と二人でインディアンの築山でのキャンプに挑んだが、結局一睡もできずに帰ってきたことを語る一節である。

There was Indian Mound. Aboriginal, it rises profoundly enigmatic... When I was fifteen, a companion and I, on a dare, went into the mound one day just at sunset. We had camping equipment with us, but we made no fire. We just sat side by side... That's what we thought, felt, about... (65-6)

〔従来の訳〕 インディアンの小山がある。土着民のつくったこの小山は意味深長な、それでいてなんともえたいのわからぬ様子でそびえ立つ。ぼくが十五歳のとき友達とぼくと、挑戦に乗って、ある日、ちょうど日没というとき…。野宿の一式はもってきたのだけれども、焚火はしなかった。寝具をのべることもしなかった。…ぼくたち、その小山について、そういう思い、そういう感じだった。(69-70)

〔熊狩り〕、志村正雄訳、富山房版『フォークナー全集―二四』、一九七二)

ここには、文法的な破綻も感情的な混乱も一切ない、標準的で美しい英語が語られている。語り手にとっては恐怖の一夜であったにもかかわらず、形容詞の濫用もなく、殆どヘミングウェイの文体を見るような思いすらさせられる。原

文が教養を具えた青年の正統的な英語であるだけに、翻訳の方も気になる余地などいっさいない適切な日本語と考えてよいだろう。

(二) 白人庶民とヤクザくずれの男の言葉

ここではラトリフの語りのなかで、ルシウスのインディアン観が表われている箇所をあげたい。町の金持ち衆の熊狩りに同行したルシウスは、食いすぎ、飲みすぎでしゃっくりが止まらなくなる。人の勧める怪しげな処方様ざま講じたが効果が現れない。そこで、ラトリフは、彼にインディアンジョン・バスケットのもとに行って、彼らの療法に救いを求めるよう示唆した場面である。尾羽打ち枯らしたとは言え、白人ルシウスにとってインディアンは魑魅魍魎、ただただ不可解な人種、とうてい助力など求められる相手ではないという思いが、彼の口から出る場面である。

"John Basket," (Lucius) says: "them Indians," he says, hiccupping slow and quiet and steady. Then he says right sudden, "I be dog if I will!" Then I be dog if hit didn't sound like he was crying. "Hit ain't a man hyer has got any mercy on me, white or black. Hyer I done suffered.... I says. "Hit ain't me that's got them. I just thought, seeing as how you had done seemed to got to the place where couldn't no shite man help you. But hit ain't no law making you go up there and get shed of them (William Faulkner, Collected Stories, 72)

〔従来の訳〕「ジョン・バスケット」とやつが言う。「あいつらインディアンめ」って、ゆっくり、しずかに、規則正しくしゃっくりしながら、やつが言う。それから、まるで急に「行くもんか!」って言うんだ。それからまるで泣いているような声になるんだよ、ほんとうだ。やつ、とびあがって、そこに立ったまま、ののしってるんだ、

泣いてるような声でさ。「ここに居るやつは白人だろうと黒人だろうと、おれをかわいそうだと思ってもいねえんだ。：おれは言ったねー「しゃっくりをしているのはおれじゃないんだぜ。おれはそう思っただけさ、もう白人じゃどうにも力がおよばないところまで来ちゃっているらしんでね。けどおめえを山に行かしてそれを止めてもらわせる法律あるって訳じゃない」(77-8)

二人の男の言葉遣いは、「数」の一致 (then Indians, I says) や、「格」(I とすべき箇所の me) や品詞の違い (suden) はお構いなし。また田舎に住む人々の庶民的な慣用語 (I be dog if) 発音 (Hit, ain't, hyer) 奔放な語順 (where couldn't no white man) などを頻繁に発している。標準的な語法から大きく外れる表現そのものが、滑稽味を帯びている。先の白人の青年の言葉とは大違いである。また、それに対する翻訳の言葉も、その語調も、語彙も、語句の配列も異なったものにならざるを得ないだろう。その点で、従来の翻訳にも、苦心の跡は十分に見られる。ただ、ラトリフの語調は少し穏やか過ぎるように思われるのだが。またルシウスの語り口も、もっと粗っぽくてもよいかもしれない。

三、二 「ルシウスによる黒人暴行事件」を語る発話

「熊狩り」という作品は、(一) ルシウスの止まらなくなったしゃっくりの物語という、トール・テールじみた「アメリカン・ユーモア」に溢れた物語であるが、話はそこだけでは終わらない。これは、(二) ラトリフの好意がお互いにとって裏目に出る「どんでん返しとアイロニー」の物語である。しかしこれにはさらにウラがあって、(三) 黒人のアッシュが過去に受けた傷を、今復讐するという「人種問題にからむ怨恨」の物語である。つまり、この作品はへ一度で三

「面白い」物語である。(そしてさらにもう一つの面白さが、(四)「マルチ言語世界の言語それぞれの衝突」の物語なのである)

ここでは、右の(三)に相当する内容で、黒人のアッシュが二〇年前にルシウスに暴行を受けたという同一の事柄について、「口上」の語り手とアッシュの二人が語っているところを検討してみたい。

(一) 白人青年の言葉

白人の青年が「口上」の箇所で、若いころのヤクザなルシウスが仲間と黒人の教会に暴れこんで、黒人青年たちの宝物であったシャツのカラーに、タバコの火を押し付けて台無しにした浪籍事件を語る場面である。

The (Negro-) picnic was at a Negro church a few miles from town. In the midst of it, the two Provines and Jack Bonds... rode up with drawn pistols and freshly lit cigars; and taking the Negro one by one, held the burning cigar ends to the popular celluloid collars of the day; leaving each victims neck with...(64-5).

〔従来の訳〕 ピクニックは町から数マイルはなれた黒人教会で行われた。その最中に…がピストルを抜き、新しい葉巻タバコに火をつけて馬で乗りつけた。黒人の男をひとりずつかまえて、燃えている葉巻の先を当時流行のセルロイドのカラーにおしつけ、その犠牲者の首にふいにヒ微かな、痛みのない、炭素の輪の刻印を…。

青年の言葉は先のインディアン・マウンドの体験の語りと同様に、的確でクールな表現である。仮に教科書の英語として採用しても、文部科学省の検定は何の問題もなくパスするような英語である。声に出して読みたい英語である。

(ただ、青年の言葉のクールさは、黒人の悲しみへの無感覚ということも表しているかもしれないが)。翻訳の表現も、前述と同様に適切なものと思われる。

(二) 黒人(当の被害者)の語り——これはもう、もう一つの外国語!

「口上」を語る教養のある青年の語りと同じ内容のエピソードを、黒人でしかも年老いた人物が語ると、どんな言葉で、どんな語調で語ることになるのだろうか。以下に見るように、同じストーリーが、殆ど別の語彙で別様に語られていることは、この作品のもう一つの見処、読み処なのである。

One time dey was a picnic. Hit was a long time back, nigh twenty years ago. He was a young man den, ... en nudder white man — I fergit he name — dey rid up wid dey pistols out en cotch us niggers one at a time en burned ... Hit was him dat burnt mine (79)

〔従来の訳〕 むかしピクニックがあったです。ずっと昔のことだったです。二十年も前のことになりました。そのころ、あのひとは若かったですが、ピクニックののさいちゅうに、あのひとと...もう一人の白人—名は忘れちもうたです—三人がピストルもって馬で乗りつけて、一人ずつわしら黒人をつかまえて、(わしらのカラーを)焼いてしもうた、あの人だったです、わしのを焼いたのは。(85)

アッシュの発話が標準の語法とどれほど異なっているかは、いちいち指摘するまでもないだろう(また、白人の庶民のラトリフの口調とも相当に違っていることも、言うまでもない)。むしろ、この事件を語った先の青年の言葉が、こ

ここで外国語と言ってもいいほどのものに〈翻訳〉されて、見事なコントラストをみせていることに瞠目したい。一方その翻訳の方を見ると、『響きと怒り』で翻訳された黒人の人物たちの言葉ほどの強い訛りは表されていない。だが、従来の黒人たちの口に乗せられていた方言めいた口調が避けられた分だけ、むしろ言葉のリズム感が少なくなっているように思えないだろうか（もっとも訳者は、老黒人がヘルシウスに対して行き過ぎたことをした」という自省めいた意識をもっていることを表そうとして、この言い澁んだような表現を意図したのかもしれないが）。

四 新しい翻訳の試み

四、一 「熊狩り」を時代小説の語調で

〈マルチ言語世界〉の物語「熊狩り」の従来の翻訳を一瞥しても、やはりその「経年対応」が求められているらしいことは、確かなようである。なお筆者がこのようなことを考える以前のある一時期、勤務校の文学部でフォークナーの「講読」を担当し、本作品を読んだことがある。その折のクラスで、ラトリフの発する一人称の「I」をどのように翻訳するかと質問したことがあった。回答には、「おれ」や「わし」といったものが多かったが、一人の学生が〈江戸の町人のようにきっぷのよさが感じられるので、「わたし」がよいと思う〉と書いてあった（K・長津、一九九三年）。以来このことが、筆者の念頭を絶えずよぎることになった。だが、フォークナーの翻訳を、「時代小説」の言語で試みたらという主題については、今日まで考え及ばずにきていた。

だが今回「熊狩り」の多様な人種、階級や、それに伴う様ざまの文体を改めて考えてみると、わが国の時代小説の多様な階級や職業をもった人々の言葉は、南部の社会の人たちの言葉を写し取るのに、よく適しているように思えてくる

のである。なお名翻訳者に関する伝説のなかには、翻訳の文体を磨くために古典や名文家の文章に学んだという話にと欠かない。生島遼一は、『三銃士』を翻訳したときは吉川英治の『新平家物語』に、『クレープの奥方』の翻訳には与謝野晶子の『新訳源氏物語』に学んだといったような（河野一郎『翻訳上達法』、一五六―七。また文体を磨くために名文家の文章に学ぶことは、普通によくあることで、名エッセイストの林望は森鷗外と北杜夫に学んだとのこと（『芸術力の磨き方』、一二四）。つまり、文体の課題に直面したとき、古典や時代小説的文章の有効性は、やはり検討に値することのようである。

四、二 なぜ時代小説なのか

フォークナーの翻訳を「時代小説」の言葉を用いて試みたらどうか、という課題を改めて考えてみたとき、その有効性の第一の根拠は、フォークナーの作品の背景になっている時代が、日本の時代小説の年代や空気に重なるところがあるということである。フォークナー作品の背景は主として、一八三〇年頃から、南北戦争後の時代を経て、一九三〇年ごろに及ぶもので、江戸時代末期から明治、大正を経て、昭和の始めの頃に当る。それは、この国の時代小説が好んで背景に設定する時期の一つであるから。第二には、前述のとおり、フォークナーの世界には、様ざまの人種が混在している。さらに南部の裕福な（或いは落ち目の）貴族階級の人々から、極貧の農夫や召使いまで多様な階級が存在する。それは時代小説の城主、家老、武士、浪人から、様ざまの商人や職人、農民、さらには芸人や渡世人まで、あるいは奥方から姫君、妻女、新造、女中、子供というふうな、様ざまのタイプの人物たちがいて、それぞれに別の言語を用いているということに通じるものがある。ちなみに、その語法の多様さをよく示す一例として、時代小説のなかから階級別の一人称と二人称の呼称の極く一端をあげてみよう。

一、二人称のいろいろ(時代小説から)

身分

一人称

二人称

殿様(奥方)、僧

わし、おれ、わたくし、拙僧

お身、貴公、お許、お主、貴様、そち、その方、御坊

御家人、侍(お方)

それがし、手前、身共、手前

お手前(様)、そこもと、そなた、貴公、その方、御仁

わたくし、拙者、おりゃ

貴方、お前(さん)、おのれ、うぬ、貴様

商人、町人(お内儀、新造)

わたし、手前、わっし、あたし、

あなた様、お前さま、この御仁、旦那、あにさん、われ、おかしら、

おいら、あっし、俺、あたくし

おまはん、おめえ、おのれ、うぬ、お前さん、あんた

下男、下女

おれ、あたし

〇〇さん、〇〇ちゃん

無頼者、渡世人

オレ、おいら、わっし、あっし

てめえ、あにい、おめえ、親分、野郎、奴、姐さん、お阿兄いさん

田舎者

おら

おめえ

芸人

あた(く)し、おいら、わっち

兄さん、兄さま、おまはん、ぬしさん

子供

あたい、おいら

フォークナーの世界を時代小説の言葉を使って翻訳するにあたって、第三の有効性は、その言葉が今日でもお馴染みで親しみ易い表現であるということである。実際その用語は右の表に見るとおり古いものではあるが、今日の時代小説のなかばかりでなく、テレビや映画の時代劇とか、落語や芝居などでもいつでも聞いたり耳にしているものだから。そして最後に第四番目に(ではあるが、意味は小さくなく)、フォークナーの小さな田舎町に住む人々と、時代小説のなかに生きる人々の一途に生きる姿の共通性ということである。時代小説の根本にあるものは、小さな藩に生きる平凡な侍や市井の人々の懸命に生きるモラルが描かれている(関川夏央、『おじさんはなぜ時代小説が好きか』。貧しい者たちの「お互いが頼り、自分の我を張っては生きられない」という知恵がある。フォークナーの世界でも、このことが人々

の日常の根本にある。そして、時としてこのような倫理や知恵をもたない人物たちの、余りにも切ない孤独や壮絶な崩壊の有様が描き出されているのである。

以上のような観点のもとに、実際にどのような翻訳になるのか、幾つか試みてみることにしよう。ここではまず、先に「熊狩り」で「従来の翻訳」として引用したものに別訳を試みてみたい。ただし、青年の「口上」の箇所の言葉は、原典の言葉と同様に翻訳も、「経年対応」を必要としない正統的な表現なので割愛する。そしてさらにそのあと引き続き、前述の『響きと怒り』と「女王ありき」の〈気がかりな〉と記した箇所について同様の試みをしてみよう。

四、三 「熊狩り」の試訳

(一) インディアンに対する恐怖——ラトリフとルシウスの発話

ラトリフは田舎町を巡り歩く人の好い巡回商人で、この辺りの農夫や町民と同様の、奔放な語り口をもっている。先に引いた、〈江戸の町人のようなきつぷのよさ〉を感じ取った学生のコメントは当たっているだろう。また彼の語りの中にでてくるルシウスは、粗雑で感情的な物言いをする人物のようである。そこで、時代小説のなかでもやや粗っぽい言葉遣いをする町人や職人、あるいは無頼者の言葉を用いてみてはどうだろうか。

☆ラトリフとルシウスの言葉〔前述三、一(二)の試訳〕

「ジョン・バスケットの畜生が何でえ！」ルシウスは申しました。「インディアンのべら坊めが」とね。しゃっくりはいくら抑せえたってゆっくりと何度も出てましたぜ。奴っこさん出しぬけに言いやがりました。「おりゃあ死んだって行きゃあしねえやな！」とさ。奴っこさんの声ときちやあ泣き声だったっていいくれえのもんでさ。おっ立って

泣いてるみてえにわめきやがってさ。「ここに居やがる野郎共(どまゝ)白人も黒人もあつたけえ血の一滴もねえ奴らだぜ」……。わたしや言つてやりやしたね、「しゃっくりりしてる奴つてえのはわたしじゃねえんだ。なあに、白人じゃ手が出ねえと思つたからちよいと別の計らいを教(おせ)えてやつただけじゃあねえのか。もつともお前(めえ)を……するつてえ定(き)めがあるわけじゃねえがナ」

(二) ルシウスによる黒人暴行事件——老黒人アッシュの発話

これもラトリフの語りのなかで引用される言葉であるが、アッシュの発した言葉そのものの(生(なま)の)引用と考えてよい。黒人特有の訛りの強い言葉なので、時代小説のなかであれば、職人、下男・下女、下っぱの渡世人、芸人といった人々の言葉を用いてみたい(時代小説のなかにも地方の田舎に住み訛りの強い言葉を発する人々も登場する。だが、その言葉は今日の青年たちには馴染みが薄いので、あえて現代でも分り易く思われる語彙を用いたい)。

☆アッシュの言葉〔前述三、二(二)の新訳〕

いつだったか、ピクニックつてのがござんした。へい、二〇年も前(めえ)のこととござんす。あのころの奴さんはまだお若けえお人でござんした。それにもう一人のお若けえお人が——名前(なめえ)なんざあ覚えちゃいねえでござんすが——ピストルをぶん回(めえ)しながら馬に乗つておいでなすつて、あたしら黒人をとつ捕めえてシャツのカラーに火をつけたんでござんす。……あのお人がわしの大事(でえじ)な宝を台(でえ)なしにしたんでござんす。

以上が「熊狩り」からの該当箇所の試訳だが、従来の翻訳に比べると、町人口調、江戸っ子口調とでも言うべきか、

かなり元氣(氣っぶ)のいい喋り方になっている(これが果たしてアメリカの南部人の語り口にあっているかどうかと
なると、いささか不安ではあるが…)。続いて、前述の「二」従来の翻訳について——「新訳を試みさせる一要因」の項
で、「響きと怒り」の従来の訳をとりあげて、「気になるところ」と述べた箇所についても、試訳を示したい。

四、四 「響きと怒り」の試訳

黒人の言葉の訳語については、それが婦人や少年の場合であっても、「熊狩り」のアッシュの場合と同様に町人や職
人、下男、下女たちの使う言葉を用いてみたい。

☆ディルシーとラスターの言葉〔前述二、一(一—二)の新訳〕

(1) 「わたしや始めと終(しま)いを見たのさ」

(2) 「お前にそんなことおやりなって若旦那はいつ申しなすったのさ。そりゃ正月の時の話じゃなかったのかい」、
ディルシーは言った。「みな衆の起きてくる前(め)えにちよっくら下見したかったんでさ」ラスターが言っ
た。

(3) 「うめくのやめなよ」、ラスターは言った。「奴らが来ねえからって、オレにや来させるなんてこたあできねえ
だろ。お前(め)えさんが黙らねえとおばあちゃん…」

四、五 「女王ありき」の試訳

この場面で語っているナーシサは、南部の名門の旧家の息子の未亡人である。その彼女が夫の大叔母に向かって、ラ

ブレターを奪回したいきさつを弁明口調で、語るシーンである。文脈のうえでは、彼女は畏まった口調で語っているところである。その意味でも、今日の普通の婦人の使う言葉よりも、もう少し上品で気取った口調の方が相応しいのではないだろうか。そこで、時代小説のなかでも、旗本の奥方や姫君の言葉や彼女たちに仕えているお女中の言葉はいかがだろうか。

☆ナーシサの言葉〔前述二、二(三一)の新訳〕

(1) わたくしは隋分長いあいだ気が狂いそうでした。世間の方々が、とくに殿方がそれをお読み遊ばして、わたくしの名前や…何度も繰り返して拝見していたわたくしの視線の動きまでお見通しになって…。

(2) お金で買い戻させて頂くわけには参らないことはよく承知致しておりました。ですからメンフィスまで参ったのでございます。(殿方はどちらも同じ、おバカさんですわ) わたくしはどうしても手紙をお返し頂きたい一心でございます。ですからあのように致すしか手立てがございませんでした。ことによつて…。

以上の数例の試みから判断できることは、時代小説の多様な語彙や語法を用いると、語っている人物の身分や感情を、従来の翻訳の訳語よりも、一層豊かに伸びやかに表現できるといふことだろう(もっとも、時代小説の言葉の語法に正確に沿っているという前提のもとのことだが。ただ同じ語り手が、相手の身分の上下や男女差あるいはそのときの感情によつて、語り口がどのように変化するかといったことについて、筆者はまったく確信がもてないのだが)。また、時代小説の語法や用語を用いれば、黒人や無教養な人々の言葉も、偏見を持たれている地域の方言めいた言葉に、依存しなくてもよい。そして、人物それぞれの言葉に、従来の訳語以上のリズム感を添えることができるし、生きて肉体をもつ

た人間の言葉のもつ味わいや面白さを、幾分なりか加味することができないのではないだろうか。

ただ、原文を「勝手に判断して、訳文に妙な匙を入れると、…そこだけむしろ安っぽく高級なことをしたつもりが、もっさり」と野暮な味付けになっている」ことがあるので、「いらぬ手出しをしないうこと」が肝要だという名翻訳家の一節があることは、銘記しておかなければならない（鴻巣友季子、二六六）。とは言え、原典によっては、翻訳も面白みのないものに終わることも案じられる。翻訳をする人の迷いや悩みは、尽きることがない。実際、右の翻訳家自身も、シェイクスピアの名訳者小田島雄志のこんな言葉も載せている。

内容をそのまま翻訳したのでは、ココロが震えない。内臓にこないと思ったときには、内容より言葉遊びのほうが大事だと、あえて誤訳をしてでも、ダジャレをいかしたんです。それで、アカデミックな人たちからはずいぶん叩かれた…。

（同、六四）

五 言語の地域性について——谷崎潤一郎『卍』をめぐって

たとえば大阪言葉を使う人物を表現するために、〈その人が大阪弁を喋るだけでは不十分である〉という問題は、河野多恵子の『卍』論に詳しく述べられている（『谷崎文学と肯定の欲望』）。『卍』は谷崎が関西に移住後、関西の女性を語り手にして書いた最初の作品である。しかも、それを先ず雑誌『改造』に連載した第一回目は、標準語で書かれている。河野多恵子は、そのオリジナルの『卍』（第一回目）の文体を、「語り手に適わしい見事なもの」であり、一方大阪言葉に移し変えた現行版『卍』の語り手の女性は、オリジナル判とは「年齢も、過去も、環境も、さらに聞き手の〈先

生」との間柄まで相違のある夫々別の女性が想像されそうである(一六)」と述べている。そこに引用された双方の版の冒頭の一〇行余りのうちの一部を写してみよう。

〔オリジナル「出」〕 先生、わたくし今日はすっかり聞いて頂くつもりで伺ひましたんですけど、でもあの、……折角お仕事のところをお宜しいんでございますの？それはそれは詳しく申し上げますと實に長いんでございますのよ。ほんたうにわたくし、せめてもう少し自由に筆が動きましたら、自分でこの事を…… (傍線引用者)

〔現行版「出」〕 先生、わたし今日はすっかり聞いてもらふつもりで伺ひましたんですけど、折角お仕事のところかまみませんでよろか？それはそれは委しいに申しあげますと實に長いので、ほんまにわたしせめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事…… (傍線引用者)

確かに、河野の指摘を念頭に二つのテキストを読み比べると、オリジナル版の語り手の女性は良家の若夫人で、しかも先生に対して幾分か甘えていているような語り口である。一方現行版で語っている女性は、(京都や大阪に七、八年しか住んだことのない)筆者にも、かつてお世話になった(下宿のおばさん)に似たような、中流家庭の婦人を連想させる口調をもっている。河野は、現行版の婦人のことをさらに大胆に、「先生の嘗ての乳母のような人物で、その後も永く同家に奉公をし、数年前に大分の年齢で職人か何かの後妻に入ったというような女性の話しぶり(二四)」と述べる。そしてそのような語調の原因の多くを、作品を大阪言葉に下訳した女性の故とし(その一人は岡山あたりの出身で大阪の女子専門学校を出た人)、またその箇所についての河野自身による試訳を示している。ちなみに、河野訳の冒頭の一文は次のとおりである。

先生（せんせ）、わたし今日はすっかり聞いて頂こと思いました（或いは「聞いて頂きたくて」）伺ひましたのですけれど、でもあの、……折角お仕事してなさるところをかま致しませんかしら？

（一九）

さらに河野多恵子は、『改造』版オリジナル『正』の言葉遣いについて、「用語は一応標準語であっても、その扱ひ方、取り合わせ方、配列の仕方が独特で、そこに大阪言葉以上に大阪言葉の調子（トーン）が漂う（一九）」と述べ、さらに井上靖や佐田稲子の標準語による関西言葉の例も引いている。なおまた、例えば、「つい」、「うっかり」、「失礼しました」、という発話でも、関西風の語調の場合には、語順が変わってくるということについても論じている。すなわち、「地域性」を抜きにすれば、標準語であっても、いかようにもそれぞれの土地の言語らしさを生み出すことができる、ということ論じているのである。（右の言葉を、関西の婦人風に言えば、「失礼しました、つい、うっかり」という語順になるという、一九）

このことは、フォークナーの南部の言葉遣いや、様ざまの階級の人々の言葉の翻訳を考える際のヒントになるだろう。つまり、訳者はいかにもそれらしい地域語を用いなくても、翻訳が可能であるということを示唆しているのである。だから南部の地域語だからとか、黒人の言語だからと言って、たとえば東北地方とか九州地方とかといった、どこか一定の地域の方言のような語法に拘る必要がないということなのである。テキストのなかの地域固有の語り口も、翻訳の語句の選択、配列、結びつきによって、標準語の語彙よってであれ、時代小説の語彙によってであれ、表現することは可能なのである。だとすれば、フォークナー作品の翻訳にあたっては、前述とおりの諸条件、すなわち、（一）時代背景、（二）多様な語彙、（三）馴染みの言葉、（四）主題の類似といった、その他の条件でも補なうところのある「時代小説」の言葉を用いる意義は十分にあるだろう。

翻訳を美女(とかそうでない人)に喩える言葉とか、スポーツの競技や音楽の演奏に喩える例は事欠かない。実際翻訳に関する論議は尽きることはない。翻訳とは、それだけ大変で困難な仕事なのである。本稿では、そういった議論に屋上屋を重ねることを避けて、ただフォークナーの翻訳の「経年対応」という観点だけを示したものである。しかし、その〈新訳を時代小説の言葉で試みてみたらどうか〉という提案には、それなりの根拠と意味や新しさがあるということについては、いささか論を進めることができたのではないかと思う。

注

(1) 本稿は、「日英言語文化研究会(AJELC)」第6回研究会(二〇〇六年四月二〇日、明治大学)に於いて発表したものに、加筆修正を加えたものである。なお、その際、当初筆者も「翻訳の経年劣化」という用語を用いていたが、会場からその語法が「建築物や器物等により多く用いられる〈経年劣化〉とは、多少意味が異なるのではないか(M・森住)」という疑義をいただいた。そこで本稿では、翻訳の「経年対応」といった表現を用いたいと思う。

(2) この語句は「村上春樹現象」を論じた『日本経済新聞』(二〇〇六年四月一六日、朝刊)のコラムから。なお、「村上春樹現象」の凄さは、彼の作品が世界三〇ヶ国以上で翻訳され、中国本土でも『ノルウェイの森』は累計一〇〇万部も読まれているとか。(もっとも、二〇〇四年の時点で、この数字を示している記事もあるが『中国的〈村上春樹熱〉』『讀賣新聞』二〇〇四年一月二〇日] また台北にはこの名前の喫茶店が三軒もあるそうである。なお、クルール・ジャパン現象が巷でよく言われるようになったのは、二〇〇六冬季五輪のフィギュアスケート競技で金メダルをとった荒川静香選手(と、そのイナバウアーの「クルール・ビューティー」)に負うところが大きいだろう。

(3) この短編集が新潮文庫版で出された同じ年の八月に、同じ訳者による角川文庫版短編集(『エミリーの薔薇(他四篇)』)が出されている。

(4) (一)〜(三)のようなコメントは多数あったが、特に(四)は、M・石渡(千葉県出身)、(五)は、K・黒木による。なお、方言と思える翻訳語によるもののほかにも、「ダジャレを漢字で処理している部分が多い」渡辺一夫訳のラブレーも「読めないという世代が増えている」といった現象にも留意しておきたい(丸谷、二〇〇五)。

(5) 拙稿「マルチ言語社会の「しゃっくり物語」——Faulknerの“A Bear Hunt”について——」〔『明治大学教養論集』、通巻四〇七号、二〇〇六年三月〕、三三二—六五頁。

(6) 例えば「エミリーへの薔薇」のエミリーはその端的な例だろう。若い読者のなかには、「彼女の孤独は余りに痛々しく、ただ可哀想と言うだけでは済まされないほど切ない」と言う人もいる(E・矢澤)。

参考文献

- Faulkner, William. *Collected Stories of William Faulkner*. Vintage Books 1995.
———. *The Sound and the Fury*. (1929; Chatto & Windus, 1961)
Steinbeck, John. *The Long Valley* (1938; Penguin, 2001)
フィッツジェラルド・D・C、村上春樹訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(白水社、二〇〇三)
フォークナー・W、尾上政次訳『響きと怒り』(富山房、一九六九)
———、高橋正雄訳『響きと怒り』(三笠書房、一九五九)
———、滝川元男訳『女王ありき』(富山房、一九七二)
———、志村正雄訳『熊狩り』(富山房、一九七二)
———、龍口直太郎『エミリーの薔薇』(角川文庫、一九五五)
———、龍口直太郎『フォークナー短編集』(新潮文庫、一九五五、一九九九改版)
ナボコフ・U、若島正訳『ロリータ』(新潮社、二〇〇五)
スタインベック・J、大久保康雄訳『スタインベック短編集』(新潮文庫、一九九三〔改訂版〕)
河野多恵子『谷崎文学と肯定の欲望』(中公文庫、一九八〇)
河野一郎『翻訳上達法』(講談社、一九九二)
関川夏央『おじさんはなぜ時代小説が好きか』(岩波書店、二〇〇六)
鴻巣友季子『翻訳のココロ』(ポプラ社、二〇〇三)
田口孝夫『文化の溝——異文化をどう翻訳するか』(『日英語の比較——発想・背景・文化』(奥津文夫教授古希記念論集))、日英言語文化研究会編、三修社、二〇〇五)

中村保男『名訳と誤訳』(講談社、一九八九)

野崎 敏『谷崎潤一郎と異国の言語』(人文書院、二〇〇三)

林 望『芸術力の磨き方』(文春新書、二〇〇三)

丸谷才一ほか『(鼎談) 決定版。世界文学全集を編集する』(『文芸春秋』、二〇〇五、一二月増刊号)

向井 敏『海坂藩の侍たち』(文春文庫、一九九八)

村上春樹『翻訳の経年劣化について』(『讀賣新聞』、二〇〇六年一月二二日、夕刊)

米原万理『不実な美女か、貞淑な醜女か』(新潮文庫、二〇〇一)

その他、時代小説の言葉遣いについては、次の作家の作品を参考にした。

池波正太郎、藤沢周平、山本周五郎、岡本綺堂、平岩弓枝、山本一力、諸田玲子、柴田連三郎、川口松太郎、久保田万太郎、そして三遊亭円生の「人情噺集」など。

(いけうち・まさなお 政治経済学部教授)